

色彩の大陸1～禁断の魔術

谷島修一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“色彩の大陸”にある軍事大国・ブラミア帝国の傭兵部隊に所属し、隊長を務めるユルゲン・クリーガーは、二年前、帝国によって滅ぼされたブラウグルン共和国軍の精鋭・“深蒼の騎士”であった。クリーガーは共和国の復興を信じ、帝国や帝国軍の内情を探るため傭兵部隊に参加していた。

一方、ブラミア帝国では、“預言者”と呼ばれる謎の人物が帝国の実権を握っていて悪い噂が絶えなかった。ある日、クリーガーは帝国の皇帝スタニスラフ四世からの勅命を受け、弟子であるオットー・クラクスとソフィア・タウゼントシュタインと共に故郷ズーデハーフェンシュタットから、帝国の首都アリーグラードへと数日を掛けて向かうことになった。その首都では、たびたび謎の翼竜の襲撃を受け、毎回甚大な被害を被っていた。

旅の道中、盗賊の襲撃や旧共和国軍の残党との出会いなどがあつたが、無事、首都に到着する。そして、首都ではクリーガーは翼竜の襲撃に居合わせ、弟子たちと共にこれを撃退する。

皇帝から命じられた指令は、首都を襲撃する翼竜を操っていた謎の人物が居ると推測される洋上の島へ出向き、その人物を倒すことであつた。クリーガーは一旦ズーデハーフェンシュタットへ戻り、その港から選抜された傭兵部隊の仲間と共に島へ出向く。洋上や島での様々な怪物との戦いの果て、多数の犠牲者を出しながらも命懸けで任務を完遂するクリーガー。最後に島で倒した意外な人物にクリー

ガーは衝撃を受ける。

ズーデハーフェンシュタットに帰還後は、任務を完遂することで首都を守ったとして、クリーガーは「帝国の英雄」として歓迎を受ける。しかし、再び皇帝から首都に呼び出されたクリーガーを待ち構えていたのは、予想もしなかった事態であった。

目次

序章	1
二人の弟子	5
指令	8
旧首都ズーデハーフェンシユタツト	13
『雪白の司書』	16
旅立ち	20
渡し舟	23
無名戦士の碑	28
酒場	30
実戦	35

序章

眩しい日差しが差す浜辺。穏やかに吹く潮風が心地良い。

ここは、二年前にブラミア帝国により滅ぼされたブラウグルン共和国の首都であったズーデハーフェンシュタットという港町から、そう遠くない美しい浜辺。私と私の弟子二人は、早朝から剣の修練のために、ここへ来た。

今日のように晴れ渡る青い空、目前に広がる水平線、美しい浜辺での剣の修練は心なしかスムーズだ。いつもは城の武道場での修練だが、そこは薄暗く、長時間いると気が滅入る。さらには、ほかの剣士なども数多く居るので気が散る上に、旧共和国の精鋭であった「深蒼の騎士」は、もはや私一人で、私の弟子二人を入れてもようやく三人という状況。そう言う訳で、城内で修練をしても他の者に珍しい物を見るような好奇の目で見られるのが、少々うんざりしていた。そういうこともあって、我々はこの浜辺には度々訪問して修練の場としている。他の訪問者も、ほとんどいないので邪魔が入らない。

私、ユルゲン・クリーガーは、ここズーデハーフェンシュタットの生まれ。ブラウグルン共和国の「深蒼の騎士」と呼ばれる騎士団の一員であった。「深蒼の騎士」は慈悲、博愛を謳い、高い剣技とわずかばかりの魔術を駆使し、長きにわたってブラウグルン共和国を守ってきた。

私は、両親を早くに亡くし六歳から孤児院育ちだった。十三歳の頃、「深蒼の騎士」であったセバステイアン・ウォルターに見出され、共和国の精鋭部隊・「深蒼の騎士」になるため教えを受け、剣術と魔術を鍛錬してきた。私は彼のことを「師」と呼び、弟子になった後は、彼が父親代わりであった。十六歳の時、私は共和国軍の一員として従軍することになり、その六年後、共和国の「深蒼の騎士」になることを認められた。そして、その後十一年もの間、私は「深蒼の騎士」の一員として共和国のために従軍していた。

ブラウグルン共和国は、三十六年前に、無血革命で王制から共和国制へと移行した。

共和国は比較的平和な時代が長かったため、本格的な戦争は長らく体験していなかった。気候が温暖なせいか、人々も穏やかな者が多いため、元々争いごとが少ない国であった。

そういうこともあって、それまでの共和国軍の仕事といえば、たまに現れる盗賊の退治などの治安維持関連の仕事や遭難事故などでの救難、また隣国ブラミア帝国との国境での小競り合い程度の紛争の対応などが多かった。

一方、ブラウグルン共和国の北側で国境を接していた軍事国家ブラミア帝国は三年ほど前からブラウグルン共和国はじめ隣国への領土的野心を露骨にむき出すようになった。帝国は約一年をかけて軍事力を増強し、周到な準備をした上で、ある日、圧倒的物量をもって共和国へ侵攻した。共和国軍と帝国軍には大きな差があり、共和国軍は実戦の経験が少なかったが予想を超えた善戦をした。しかし、最終的には帝国軍が共和国の首都ズーデハーフェンシュタットに迫る中、共和国軍は首都付近を流れるグロースアーテツヒ川での最終決戦でほぼ壊滅状態となり、その後、無条件降伏した。これは当時の共和国政府による、首都の住民に被害を及ぶことを防ぐための決断だった。こうして共和国は帝国に滅ぼされ併合されてしまった。併合後は、共和国軍は解体され、共和国の首相はじめ多くの閣僚、軍の上層部はほとんどが処刑されるか、收容所に幽閉されている。

今では、この戦争のことを「ブラウロット戦争」（青赤戦争）と呼んでいる。青は共和国の軍旗の色、赤は帝国の軍旗の色であったので、それから由来して名付けられた。

「ブラウロット戦争」の後の二年間は、ブラミア帝国は他の国への侵略をしていないが、帝国の北方にあるテレ・ダ・ズール公国との国境付近での小競り合いが続いているようだ。帝国軍司令部では、テレ・ダ・ズール公国への本格的な侵攻も検討されていたようだが、「ブラウロット戦争」での兵力の消耗が予想よりも大きく、公国へ侵攻するまでの兵力および兵站が整っていないようで、帝国は今のところ具体的な動きをとっていない。

ブラミア帝国に侵略されるまでは、ここズーデハーフェンシュタット

トはブラウグルン共和国の首都であった。ここは港町で他国との貿易で栄えていたが、帝国に侵略・併合されてからは、帝国軍が駐留。そして、一般のブラミア人も少なからず移住して来たりしている。ブラミア帝国は大陸の内陸部に位置するため海がなく、移住してきたブラミア人の中には海にあこがれていた者も少なくないと聞いている。

一方、共和国の政権や軍の上級士官であった者で処刑を免れた者の多くは、地方都市や寒村へ家族もろとも強制的な移住させられ、さらに帝国の監視が付いている。そして、元共和国の住民は二級市民として扱われており、様々な制限が課されている。共和国時代は比較的自由な社会であったが、現在の帝国の統治はまさに圧政といってよい。帝国は住民の反乱を恐れ、街では常に多数の帝国軍兵士が立ち、住民を監視している。さらに夜間の外出禁止や政治犯狩りなど厳しい施策をとっている。住民には移動の自由は無く、税金の徴収も多くなり経済的な面でも元共和国の住民の不満は大きい。

私は、「深蒼の騎士」ではあったが、当時、下級士官であったため処刑は免れた。私の他にも、さほど多くないが共和国軍の生き残りの下級士官、一般の剣士、魔術士などの一部が、帝国に忠誠を誓うことを条件で、傭兵として帝国に雇われている。

一方、元共和国軍で、傭兵として雇われるのをこころよしとしない下級士官たちの多くは、反乱の疑いありとして、やはり多くが収容所に幽閉されている。

私が今、所属する傭兵部隊には、最初、我々のような元共和国軍の者が参加していたが、その後、ほかの国からやって来た流れ者や、賞金稼ぎだった者など加入して、雑多な構成員となっている。

元「深蒼の騎士」で傭兵として参加している者は、私、一人だけとなっている。私は特に剣術が優れていたせいもあって、現在では傭兵部隊の隊長としての役目も務めている。

私は、雑多な構成員の中でも「深蒼の騎士」の誇りを忘れずにいようと心がけていた。さらには本当は心の奥底にある、帝国に対する反抗心も表面上は抑え、従順を装っている。

反抗心を持ちながら私が傭兵部隊に参加している理由はいくつか

ある。

帝国による合併後すぐに武器所有禁止令が出され、一般市民の武器の所有は禁止された。しかし、傭兵部隊に所属すれば剣や魔術の修練が許可されるということだった。私は剣の腕を鈍らせないためには傭兵部隊に加入する必要があった。私以外の隊員達も同様に思っているものがほとんどだ。

また、私はいつか共和国の再興を望んでおり、そのために帝国軍の内情を知っておく必要があると考えたからだ。軍の内情を深く知るためには、軍の司令官達に信頼されなければならないと考えており、命令された仕事は確実に遂行している。そのせいもあってか、帝国軍から丁重に扱われるようになっていく。

二人の弟子

朝、浜辺に来て修練を始めて、かれこれ三時間は経つだろうか。だいぶ日が高くなってきた。私の弟子の二人は、剣を交え、お互いの動きについて話している。私も時折、助言をしつつ修練を進めている。傭兵部隊の隊員全体の訓練では、弟子のみに個人的な助言は、立場上することができない。そう言うこともあって、我々は必要があれば休暇を合わせて、集中的に修練をやっている。

私の二名の弟子は、それぞれ違う理由ではあるが共和国崩壊後に傭兵部隊に加入した。

一人は、オットー・クラクス。

長身で金髪の碧眼の男性で二十四歳になる。ズーデハーフェンシュタットの北にある都市モルデンの出身だ。モルデンは「ブラウロット戦争」で戦場となり街は焼野原となった。戦後、復興作業が続いているようだが以前のような規模にまでは再興されないままになつていくという。オットー自身は帝国軍が侵攻してきた時、義勇兵として参戦していたそう。彼の家族は戦いの前にズーデハーフェンシュタットへ脱出。彼自身も帝国軍との激しい戦いの後、命からがら脱出し、ズーデハーフェンシュタットまで逃げ延びた。その後、共和国が無条件降伏した後、オットーは傭兵部隊に志願。そこで私と知り合うことになった。彼は、私が「深蒼の騎士」だということで、その騎士道を学びたいということ。弟子入りした。モルデンでの戦闘で思うような戦いができなかったことが心残り、剣技を極めたいという。そして、いつか「深蒼の騎士」のようになりたいという。

もう一人の弟子は、ソフィア・タウゼントシュタイン。

赤毛の長髪で青い目が美しく、女性にしては背が高め。彼女は、まだ二十歳になったばかりだ。ここズーデハーフェンシュタットの出身。彼女自身は「ブラウ戦争」時は、カレッジで学ぶ学生だったため戦争には参加していなかった。彼女の叔父が「深蒼の騎士」だったそう。叔父は「ブラウロット戦争」の際、国境防衛隊に所属していたそうだが、開戦まもなく戦火に紛れて行方不明となったと

聞く。戦後、彼女も叔父のような「深蒼の騎士」になりたいと思ひ、カレッジを中退し、「深蒼の騎士」の数少ない生き残りである私を探し当てて、弟子となったわけだ。

二人は性格も剣の扱いも対照的だが、自らの持ち前を上手く活かすように指導している。

オットーの剣さばきは大胆で、力強くかつ巧みだ。その長身から振り下ろされる刃に、まともに切られれば致命傷になる。恐れをあまり感じることがないのか、相手の懐に飛び込んで積極的に戦うスタイルだ。

一方、ソフィアは持ち前の反射神経で、相手の動きをかわし、自分へのダメージを最小限にする。その軽やかな動きは女性の腕力の弱さをカバーしている。素早い動きで、相手に少しづつダメージを与え、最後には確実に倒す。さらに、彼女のルームメイトの魔術師から伝授されている珍しい魔術も戦いに利するものであろう。

そして、二人も私同様に共和国を現在の帝国の占領から解放し、共和国の再興を夢見ているようだ。弟子の二人の思いはそれぞれだが、「深蒼の騎士」の慈悲、博愛を謳う、その精神性を傳承していこうとしている。

私は十三歳の頃から、二十年の長きにわたり剣術の修練を続けてきた。私自身にもかつては師であるセバステイアン・ウォルターがいたが、私が「深蒼の騎士」に就任した時に彼は「もう、教えることはない」と言い、しばらくして、彼は軍を退官した。その後は、私は彼とは会うことも無くなった。風の噂によると彼はどこかに旅に出たようで、その後の行方は分かっていない。

私自身の戦い方のことを言うと、武器は少し短めの剣と投げナイフを所持している。ナイフは常に三本持ち歩き、実戦の際は敵に投げつける。投げナイフを持つ騎士は少ないので、意表を付いた攻撃が可能だ。多くの敵が不意討ちに合うことになる。しかもナイフには猛毒が塗ってあり、刺されれば体が麻痺し、早く処置をしないと手遅れになる。しかし、私自身も実戦を模した訓練は数え切れないほどこなしてきたが、実戦の経験は少ない。「ブラウロット戦争」でも自分が所属

する首都防衛隊が戦闘になる前に共和国が降伏したため戦闘には参加しなかった。

「深蒼の騎士」の、剣術や魔術などの伝授は、子弟制度で行われる。大抵、師に二〜三人の弟子が付き、その教えを伝授する。我々、「深蒼の騎士」達は、伝統的に何十年もこの方法でやって来た。現在は、教えることができる「深蒼の騎士」は、皆、戦死したか、収容所に幽閉されてしまっているため、私のみとなってしまうている。「深蒼の騎士」は、風前の灯火と言ってもよいかもしれない。

私は、二人の修練を見つつ、自分の師の下で修練を積んでいた若い頃のことを思い出していた。

指令

私は、懐中時計に手をやり、時間を見た。時計の針が、正午になろうとしていた時、突然、「クリーガー！」と私の名前を呼ぶ聞きなれた声が聞こえた。

その声のほうに顔を向けると浜辺の遠くから、こちらに向かって来る騎馬がいる。

この声はズーデハーフェンシユタット駐留軍、第五旅団の指揮官で重装騎士団の団長でもあるボリス・ルツコイだ。

ルツコイは、背は低いのが、がっしりとした体格で、四角い顔つきと口髭が特徴的だ。彼はブラミア帝国の貴族階級の出身だ。帝国軍の上級士官は貴族階級の出身が多と聞く。ルツコイの性格はと言うと、帝国軍人ではあまりない気さくな性格だ。しかし、戦闘となると狡猾さと発揮するタイプだそう。帝国軍の主流派の指揮官は圧倒的物量にものを言わせ、力押しで攻めると聞くが、彼は多様な戦略で敵を翻弄するタイプ。『ブラウロット戦争』では彼の指揮する旅団は兵力の損害が一番少なかったという。彼は元共和国軍の我々にも一定の敬意をもって接してくれる人物だ。彼は傭兵部隊の統括もしていることから我々との接点も多く、我々は比較的友好的な関係となっている。あくまでも表面上はだ。

帝国軍の重装騎士団は、その名の通り厚い鎧と盾を身に纏った重装備の騎士だ。普通の弓矢では、その盾を貫通することはできない。剣や斧でも一撃では致命傷を与えることは難しいだろう。重装騎士団は、戦場では分厚い壁のように聳え、圧倒的な威圧感を出し、敵を怯ませる。その猛勇さでブラミア帝国の重装騎士団の名は、大陸中に轟いていた。

その重装騎士団でもあり、ズーデハーフェンシユタット駐留軍の司令官であるルツコイは、私のそばまで来ると馬を止めた。今日の彼は、鎧は纏わず、士官の正式な服装だ。

「わざわざここまでお越しいただくとは、緊急の用でしょうか？」

敬礼した後、私は尋ねた。

ルツコイは馬を降り、少し呼吸を整えてから話し始めた。

「クリーガー、休暇のところ申し訳ない。急ぎの要件でな。実は…、皇帝陛下からの勅命が来た、君に直接会って話したいそう。首都へ出向いてもらう」。

「皇帝陛下が？」

思わず私は聞き返した。皇帝が自分のような傭兵に用件があるとは、通常だとあり得ない話だ。

「用件は…、一体、何でしょうか？」

「ゆつくり話そう」。

ルツコイは岩場を指さした。座って話そうということらしい。我々は岩場の適当な場所に座った。

ルツコイは今回の用件について話し始めた。

ここ半年ぐらいの間、ブラミア帝国の首都アリーグラードでは謎の翼竜の襲撃をたびたび受けているという。どこからともなく襲来する翼竜に重装騎士団などが対処し、その都度、なんとか撃退はできているようだが、犠牲者が少なくないという。そのため、それらの翼竜がどこからやって来ているか、帝国は大規模な調査を開始。相当な苦労の果て、おおよその場所は判明したそう。翼竜はズーデハーフェンシユタットから船で約三日の海洋上の島から来ているらしい。その調査に基づいて、百名程度の重装騎士団を海軍の最新鋭巡洋艦に乗せ調査隊を編成、その調査隊を二度派遣した。しかしながら、二度の調査隊は艦もろとも消息不明となっている。

そう言えは数か月前、港で重装騎士団が集まっていたという噂を聞いたことがあった。それが調査隊だったのだろうか。

ルツコイは説明を続ける。

帝国軍司令部は、それら二百名の騎士団が全滅していると考えている。さらに、その島には翼竜だけでなく、未確認の怪物がほかにも多数存在していると想定している。司令部は騎士団は首都の防衛や旧共和国領内での統治に必要なため、これ以上人員を割けないという理由で、傭兵部隊から新たに調査隊を編成し派遣したいということのようだ。しかし、本音は精鋭である重装騎士団の被害をこれ以上、大き

くしたくないということだろう。島における「敵」の勢力の調査、あわよくば「敵」のせん滅が目的だ。調査隊は傭兵部隊から百名程度で編成し、人選は私に任せたいという。

「陛下は君に一度、直接会ってみたいと言っているそうだ。それに、先ほどの話以外にも話したいことがあるようだ」。

私は少し考えてから答えた。

「なぜ私なのでしようか？ 私は、たかだか傭兵部隊の一兵士です。陛下が私のことを知っていること自体不思議でなりません」。

「そんなことはないだろう。私が傭兵部隊と部隊長である君の名前の報告はしてあるからな、当然皇帝の耳に入ってもおかしくない。「深蒼の騎士」というのが気を引いたのかもしれない」。

「なるほど」。

私は話題を任務の件に戻した。

「それに話から推測すると、これは非常に難しい任務です。敵の勢力が全く不明であるにもかかわらず、たった百名で敵地に取り込むわけですから。『あわよくば敵をせん滅』は不可能でしょう。下手をする、先に派遣された重装騎兵団のように、こちらがせん滅させられる可能性のほうが高いと思います」。

重装騎士団にできない任務が、傭兵部隊の我々にどこまでできるのか。

「そうだな。今回は、あくまで調査が目的というから、無理をせず帰還することを最優先で考えてくれ。傭兵とはいえ、今の君は帝国の重要な士官だと思っている」。

ルツコイは「深蒼の騎士」に一目置いているらしく、普段から、私に色々気を使ってくれている。

「ありがとうございます。そう言うことでしたら、任務を果たしたいと思います。人選も検討します」。

「期待しているよ。準備をして明日の朝、首都へ出発してくれ。軍の馬を用意するので使ってくれ」。

そういうと、ルツコイは立ち上がり、ズボンに付いた砂を払いながら答えた。

私も立ち上がり直立不動の姿勢で答えた。

「わかりました。ご期待に添えるように致します。ところで、弟子二人も同行させてもよろしいでしょうか?」。

「あの二人か、いいだろう。馬も用意する。ただし皇帝との謁見は君一人だけだ」。

ルツコイはそう言うと、馬にまたがり街のほうへ戻っていった。

これまで様子を見ていたのだろう、オットーとソフィアが歩み寄ってきた。

「どうしましたか?」、オットーが訪ねた。

「皇帝から勅命が来た。首都アリーグレードへ向かう」。

「えっ!」、ソフィアが驚いて声を上げた。

「でも、何の用で?」

「帝国の首都を脅かしている翼竜の住処を調査する仕事に任命されるということだ。傭兵部隊から百名ばかり選抜し調査隊の編成もしなければならぬだろう。それに、翼竜調査以外にも何か話があるらしい」。

「なぜ傭兵である師にお願いするのですか? 帝国軍はどうしているのでしょうか?」

オットーは当然に持つだろう疑問を口にした。

私は、ため息をつきながら答えた。

「これまでに二度、帝国軍の重装騎兵団が派遣されたらしいが、全滅しているようだ。彼らは、これ以上損失を出したくない。そして、傭兵である我々なら死んでも損害は少ないとみているということだ」。

「なるほど、そういうことですか。捨て駒というわけですね」。

オットーは、少し怒気を含んだ声で言った。

「私は捨て駒になる気は無いよ。ルツコイも帰還を最優先で、と言ってくれている」。

私はオットーをなだめるような口調で話す。

「急だが明日朝に首都アリーグレードに向かって出発する」。

「本当に急ですね。私たちはどうすればいいでしょう?」

ソフィアは不安そうに話した。

「首都へは君らにも同行してもらおう、いいかね？」。

それを聞くと、ソフィアは嬉しそうに答えた。

「もちろんです。一度、首都に行ってみたいと思っていました」。

「ここ、ズーデハーフェンシユタツトから首都アリーグラードまで四日、首都滞在が三〜四日と考えれば、ここに戻ってくるまで十二日程度かかるだろう」。

私は続ける。

「首都から戻ってきたら、調査隊を編成しないといけないようだ。その調査隊には、君らに参加してもらおうことになる」。

「はい、わかりました」。

弟子の二人は答えた。

「おそらく、この調査隊の任務は、これまでで一番大変な仕事だ。心しつかかれ。明日の準備も必要だから、今日の修練はここまでにして城に戻ろう」。

我々は、今日の修練はここまでにして、美しい浜辺を後にした。

旧首都ズーデハーフェンシュタット

我々は波辺からズーデハーフェンシュタットの街に戻ってきた。ここは、先の戦争で戦火を免れたので、城も、街も、美しいままだ。三十六年前に共和制になってからは、城壁の中は議事堂や公邸、軍の兵舎などとして利用されていた。占領後は帝国軍の宿营地としても利用されている。

このズーデハーフェンシュタットという街は一年の中でも天気の良い日が多く、気候も安定している。非常に住みやすい街だ。住みやすい街であったといったほうがいいだろう。

ここは港町で、もともとは貿易で栄えた街だ。港も、戦火から逃れることができたので、今でも賑わっている。しかし、街中は帝国に占領されてからは、人出は幾らか少なくなっただろうか。大通りでは辻ごとに帝国軍の重装騎士や兵士が数名立っている。これは住民の監視のためだ。港での貿易はこれまで通り認められるようになって、かろうじて街の経済は活発だ。幸い、多くの住民の生活水準は少し下がった程度で済んでいる。しかし、戦後二年たってからも占領に反発する住民も少なくない。そこで、帝国は懐柔策の一環として、ズーデハーフェンシュタットの市長やいくつかの主要な行政のポストは旧ブラウグルン共和国出身者を就かせている。行政を執行する官僚制度もほぼそのまま残っている。行政や司法は、もともと帝国より共和国のほうが進んでいたもので、そのまま残し、逆に帝国は本国での制度改革の参考に行っているようだ。

戦後すぐは元共和国軍の残党によるテロなどもあったが、最近はめっきり少なくなった。帝国駐留軍の司令官ルツコイとの話によると、帝国に占領された旧共和国の都市の中では、首都であったズーデハーフェンシュタットの統治は比較的うまくいっていると考えているようだ。

私と二人の弟子オットーとソフィアをはじめとする傭兵部隊の隊員達は、城の中にある宿舎で生活している。今の私は傭兵部隊の中では、部隊を取りまとめる上級士官扱いなので個室を与えられている

が、オットーをはじめとする傭兵の多くは相部屋となっている。

女性はソフィアなど六人いるが、二人で一部屋ずつ与えられている。全員が大部屋に詰め込まれている男性兵士に比べると環境は良さそうだが、不便なことも多いようだ。そもそも、傭兵部隊は城で空いていた倉庫などの空き部屋をあてがわれているので、帝国の正規軍と比べると待遇はかなり劣る。

ちなみに、私が上級士官扱いなのは、戦後に当時の上級士官がほとんど処刑か追放されたせいなのだが。また、司令官のルツコイに気に入られていることもあるようだ。おかげで住居以外にもいろいろ融通が利く。

我々は明日の朝の集合時間の確認をしてから、それぞれの部屋に戻るため別れた。

途中、城の通路で私は魔術師で傭兵部隊の副隊長でもあるエーベル・マイヤーと出会った。彼とは共和国軍時代からの付き合いだ。かれこれ五年になる。我々は軽い挨拶を交わした。

「どうだい調子は、隊長殿？」

エーベルはいつも冗談ぽく、私のことを「隊長殿」と呼ぶ。共和国時代はお互い下級士官だった。いまは私のほうが上官になる。しかし、魔術については彼に教えられることは多い。『深蒼の騎士は』剣技だけでなく、若干の魔術も駆使するが、あくまでも補助的なものだ。魔術師から見れば、ごく初歩的な魔術しか使えない。

「いつも通りだよ」。

私は笑いながら答えた。

「ちようどよかった、いい魔石を手に入れたから進呈しよう」。

と、言っただけでエーベルはポケットから魔石を取り出して見せた。紫色の見事な魔石だ。

「いいのか？かなりよさそうな物のようだ」

「我が優秀な傭兵部隊の隊長殿が、安っぽい魔石を持っているのは部隊の恥だからね」。

エーベルは笑って見せた。私は魔石を受け取り言った。

「いつも世話になって申し訳ない」。

「気にするな。じゃあな」。

軽く手を振ってエーベルは去って行った。私は改めて魔石を見つめた。少しでも魔術に触れたことのある者なら、これは、かなり高価な魔石だとわかる。

魔術を使うには「魔石」の力を利用する。これがないと誰も魔術を使うことができない。術者の集中力と魔石の「品質」によって、魔術の威力に違いが出て来るので、魔術師は常に良い魔石を探す傾向がある。私のような補助的にしか魔術を使わない者は、あまり良いものを持つても、本当は持て余すだけだ。

「魔石」はどこにでも有るというわけではなく、大陸の一部の土地からしか採掘されない。この大陸で出回っている魔石の大部分は、「鉈山地方」と呼ばれる土地で採掘されている。鉈山地方は、旧共和国の東北に位置する「ダーガリンダ王国」にある。ここでは魔石以外にも鉄や銅などの鉈物も採掘され、それらの取引が、その国の一番の収益源となっている。

ダーガリンダ王国もブラミア帝国と隣接しているため侵攻対象となっていたと聞く。埋蔵量の多い魔石も魅力的だろう。しかし、帝国との国境付近には高い山脈が連なっており、侵攻する大きな障害となっているため、後回しにしたようだ。

私は袋を取り出し、入っていた元々の魔石を取り出し、代わりにエーベルにもらった魔石を入れた。

『雪白の司書』

ソフィアは浜辺での訓練の後、クリーガーたちは別れ城内の自室に戻った。同室のアグネツタは留守のようだ。

ソフィアのルームメイトは魔術師だ。名前はアグネツタ・ヴィクス・トレーム。彼女はテレ・ダ・ズール公国のさらに北方にあるヴィット王国の出身。その王国は平和を好むと聞く。王国では、古来より魔術の研究が盛んで、多数の魔術書が書かれている。その多くの魔術書が王立図書館に集約されており、魔術師は魔術を学ぶために図書館に集まるようになった。そこで、いつしか王国の魔術師のことを『司書』と呼ぶようになったという。ヴィット王国は、冬の長い雪国ということもあり、我々のようなヴィット王国以外の者は、彼らのことを『雪白の司書』と呼んでいる。

アグネツタは約一年前にズーデハーフェンシュタットに来て、傭兵部隊に加入した。ズーデハーフェンシュタットにヴィット王国出身の者は他にいない。ヴィット王国は鎖国のような政策をとっているため、実のところヴィット王国の者が国外に出るのは非常に珍しいことだ。彼女は国外の魔術の研究で旅をしているという。傭兵部隊に入ったのは、魔術が実戦でどれぐらい使えるか知りたい、というのが理由だ。

ソフィアとアグネツタは年齢も近いので、気も合っているようだ。

アグネツタは訓練の時間以外は街中に出かけることが多い。魔石や魔術書を探して頻繁に商人と合ったりしているようだ。

ソフィアは、自分の剣を置いた後、ため息をついて、ベッドに横になった。

早朝からの修練でちよつと疲れていたもので、横になったら、少し眠ってしまったようだ。どれぐらい時間がたっただろうか。窓の外はまだ明るいので、眠っていたのは、一、二時間といったところだろうか。室内で人の気配がする。アグネツタが戻ってきたようだ。

アグネツタは、ソフィア同様、女性にしては身長が高い。緑の瞳に、茶色い長髪。任務中以外は刺繍が特徴的なヴィット王国の民族衣装

をいつもまとっている。

「起こしちゃった?」

目覚めたソフィアに気が付いて、アグネツタはいつもの明るい口調で尋ねた。

「大丈夫。今日は朝早かったから、横になつたら眠ってしまったわ。」

寝起きなので、ちよつと声がかすれている。

「明日も朝早いから準備をしないと」。

ソフィアはそう言いながら、身を起こした。

アグネツタはちよつと自分用の飲み物をカップに注いでいるところだった。

「何か飲む?」

「お願い」。

アグネツタはもう一つカップを取り出して、飲み物を注ぐとソフィアに渡した。

「ありがとう」。

ソフィアはまだ眠そうな声だ。

「今日は、また探し物?」

「そうよ」。

「いいものあつた?」。

「今日は収穫なし」。

アグネツタはため息をついた。

「ズーデハーフェンシュタットで入手できる魔石や魔術書も、そろそろ目新しいのはなくなってきたわね」。

“雪白の司書”の一人でもあるアグネツタは、様々な魔術書を収集して研究していることもあって、様々な魔術を使うことができるという。火の玉を投げつけたり、火の壁を作り敵を防ぐ火炎魔術。濃霧を発生させたり、局地的に雨を降らせる水操魔術。物や自分を動かしたり浮かせたりする念動魔術。広範囲に雷、雨や雹を降らせたり突風を吹かせる大気魔術。土や粘土からゴーレムなどを作り操る傀儡魔術などがある。使える者はほとんどいないが、時間や空間も操作するような魔術もあるらしい。これらの魔術はヴィット王国の魔術師達の

数百年にわたる研究の賜物だ。アグネツタ自身は火炎、水操、念動、大気魔術が使えるらしい。

ソフィアはアグネツタから個人的に魔術の指導を受けているので、私やオットーより使える魔術の種類が多い。深蒼の騎士は、火炎魔術と水操魔装のいくつかを使う。ソフィアはそれに加えて念動魔術と大気魔術をいくつか使えるようになっていて。

「傭兵部隊に来て、そろそろ一年ぐらいたよな?」。

ソフィアは、カップの飲み物を飲み干すと、アグネツタに尋ねた。

「そうね、毎日訓練ばかりで実戦で魔術が使えない状態には、そろそろ飽きて来たわ」。

「そういえば、近々実戦の機会があるかもよ」。

今日の浜辺のクリーガーから聞いた話を思い出して言った。

「そうなの?」

アグネツタは驚いて向き直った。

「今、首都が翼竜に襲われることが良くあるそうで、その事件の関係の出勤があるかもと聞いたわ」。

「帝国軍が翼竜の調査団を大陸のあちこちに送り込んでいる、というのは聞いたことがあるわね」。

アグネツタは翼竜や調査団のことを知っているのか。私はさつき初めて聞いたのに、とソフィアは思った。

「師が、そのことで首都に呼び出されたのよ。私もそのお供に行くことになったので、二週間ほど空けるわ」。

「あなたたちが戻ってきたら、出撃の機会があるかも、ということね」。

アグネツタは、ちよつと嬉しそうだ。ズーデハーフェンシュタットの傭兵部隊は、結成されてから二年の間、盗賊退治や暴動鎮圧のような仕事が多かった。ズーデハーフェンシュタットでは盗賊も暴動もかなり少なくなっていることもあり、最近途中から入隊してきたものは、実戦の機会がない者も多い。そのせいもあってか、戦いを求めて参加してきた血の気の多い隊員は、脱退していく者もいる。

「また、実戦用のいい魔術があつたら教えてよ」。

そういうと、ソフィアは明日の準備を始めるため、ベッドから立ち

上がった。

「私の魔術はすべて実戦用よ」と、アグネツタは答えた。

旅立ち

翌日の早朝、比較的暖かい気候のズーデハーフェンシユタットと言えども、早春の空気はまだ少し冷たい。既に陽は登っているが、我々が待ち合わせした馬屋前は、城壁に遮られて朝日は差し込んでいない。

これから、私とオットー、ソフィアの二人は帝国の首都アリーグラードに向けて出発する。私が馬屋前に到着すると、オットーとソフィアは、既に集まっていた。

「おはよう、よく眠れたかな？」

私は声を掛け、弟子の二人に軽く挨拶をして馬屋に入った。そこにはルツコイと馬の世話係が待っていた。見送りに来てくれたのだろうか。ルツコイという男は本当にマメだ。

「わざわざ司令官のお出ましですか？」

私は敬礼してから、冗談ほく話しかけた。

「いい馬を用意しておいたからな。では、道中気を付けてな」。

ルツコイは笑いながら話した。

「ああ、これを忘れるところだった。今回の指令書だ。道中、帝国の関係者に会ったら、これを見せれば、お咎めなしだ。これがないと首都までたどり着けないからな」。

帝国軍の関係者以外は街の外に出ることは許可されていない。それは傭兵部隊と

いえども例外ではなかった。このような命令書などの書類がなければ、場合によっては拘束されてしまう。

「ありがとうございます。では、早速出発いたします」。

私は、ルツコイから指令書を受け取って礼を言った。そして、我々三人は用意された馬にまたがった。毛並みがいい栗毛の馬だ。本当にいい馬を用意してくれたらしい。我々は、ルツコイに敬礼し、手綱で馬に合図を送り出発した。

これからズーデハーフェンシユタットから帝国の首都・アリーグラードまで四日間の旅だ。一日目は、グロースアーテツヒ川を越え宿

場町のフルツスシユタツトまで、二日目は旧共和国の第三の都市・モルデンまで、三日目は、旧国境を越えて、ヤチメゴロドまで移動し、四日目には首都に到着する予定だ。戦後になってから、ズーデハーフェンシユタツトを出るといふことは任務で数回しかなかった。今回も任務ではあるが、我々が帝国の首都を訪問するのは初めてだ。折角なので、久しぶりの長旅を楽しむとしよう。

「司令官は、早朝から、ご苦労なことですね」。馬をしばらく進めると、オットーが話しかけてきた。「師は彼のお気に入りのようですね」。

オットーは、ちよつと皮肉っぽく言った。

私は、それには皮肉は気にせず答えた。

「そうだな。そのおかげで、いろいろ都合の良い事が多い。しかし、元共和国軍や住民の中には、それを快く思っていない者も多い。敵になびいた裏切り者と言われたり、いろんな陰口をたたかれたりしているのは、知っているだろう?」。

「師は、実際のところはどのようなのですか? 帝国に怒りは感じていないのですか?」

オットーも私が帝国に従順なことに疑問を感じているようだった。「怒りはあるさ。しかし、私一人でもなる問題ではないし。もし、良いタイミングがあれば共和国再興もいだろう。ただ、今、帝国に盾突くのは無駄なことだ」。

旧共和国関係者による反乱の芽は、戦後、ことごとくつぶされてきた。そして、我々、傭兵部隊もその仕事に手を貸してきた。さらに、もともと戦争慣れしていない共和国の人間が、今の状態で帝国に逆らうのはどう考えても得策ではないと私は考えていた。

「城の中でこういう話はやめておこう。どこに耳があるかわからないからな」

と言つて、私は、この話題を打ち切った。

馬はゆつくりと城を出て、城下町に入った。早朝の街は、人出は少ない。大通りの角には帝国軍の兵士の見張りが立っているが、そればかりが目立つ。彼らは交代制で二十四時間空けずに立っている。帝国軍の間では我々のことはすでに通達が出ているようで、馬を止めら

れることもなかった。ルツコイが手配したのだろう、仕事に抜かりがない。

街を取り囲む街壁の門までやって来た。我々は見張りの衛兵に敬礼をして門を出た。門は、通常夜間は閉じられている。本来、この時間はまだ開いてないはずだが、我々の通過が伝わっていたのだろう門は開放されていた。こちらもルツコイが手配してくれたか。

外壁の門を抜けると私は空を見上げた。今日もいい天気で旅日和だ。

我々は順調に馬を進める。

渡し舟

まだ早朝の若干冷たい空気の中、我々は旅路を進めた。ズーデハーフェンシユタットから馬で一時間程度のところに、グロースアーテツヒ川と呼ばれる大きな川が流れている。先へ進むには、ここを渡し船を使って渡らなければならない。

この川の対岸は、*「ブラウロツト戦争」*の最終決戦で共和国軍が背水の陣で戦ったところだ。ここでの戦いで、共和国軍は帝国軍に大きな打撃を与えたものの主力は壊滅。その後、共和国は降伏を決めた。それによって、共和国の旧首都ズーデハーフェンシユタットは戦火から免れることができた。帝国のほうは戦争には勝ったもののこの戦いで軍が受けた痛手は大きく、二年たつても戦前の状態にまで兵力が回復していないという。その理由から帝国が次に考えていると噂されている、北方のテレ・ダ・ズール公国への侵攻は行われない状態のままである。

当時、私は首都防衛隊に所属していたので、幸運なことに戦闘に参加することなく終戦を迎えた。

戦後、一時的に帝国軍の指揮下となった首都防衛隊は、*「グロースアーテツヒ川の戦い」*での遺体を埋葬する作業に参加することになったが、気持ちのいい仕事ではなかった。それ以来、旧共和国の者は自由に移動ができなくなっていたため、ここには来ていなかった。

ほどなくして、我々は川の渡し舟の船着き場に到着した。渡し舟の受付場所まで行き、主に話しかける。

「次の渡し舟はいつですか？」

「十五分後です。待ち時間が少なくて、ついてますね」。主は少し微笑んで見せた。「最近の旅人が少なくなったので便を減らしたんですよ」。

「なるほどね」。

「旦那は共和国出身の方ですか？」

「そうだ」。

「最近、共和国の方は、ほとんど見かけなくなりました」。

そうだろう、今では共和国の者は移動が制限されている。

「逆に帝国の関係者が増えたので、奴らのために働くのはシヤクなのでね。それもあって便を減らしたんです」と、主は意地悪そうに笑った。「便を減らした分、運賃を値上げしたので、私の収入に変化はほとんどないんですけどね」。

さすが、商売人、しつかりしている。帝国は渡し舟の経営には口出ししていないようだ。

「最近、帝国の首都で事件があるようですが、何か知っていますか？」
客に帝国の関係者が多いと聞いて、私は今回の翼竜の襲撃騒ぎについて、どれぐらい話が広がっているのか、確認したくて訪ねてみた。「帝国の首都で？」

渡し舟の主人は、少し首をひねった後、話し出した。

「ありますよ、三年ぐらい前から、『預言者』といわれる人物が皇帝に取り入っているらしいですよ。それ以来、帝国は軍備の増強が始り、隣国への食指を伸ばしてきた。最初の犠牲が我が共和国だったというわけ」。

「『預言者』？。初めて聞いたよ」。私は、予想外の話に少し驚いた。「あくまでも噂だけだね。『預言者』が取り入って以来、皇帝も人が変わったようになったとか」。

なるほど、事実なら胡散臭いが、権力者に取り入る者の話は古今東西よくある話だ。しかし、今回の翼竜の襲撃とは関係がなさそうなので、さほど気にはしなかった。

「首都での翼竜の襲撃の話は聞いたことないですか？」

「ああ、それ、聞いたことがありますよ。ここ半年ぐらいで聞くようになった話です。襲撃のたびに帝国軍にも相当な被害が出ているらしいですよ。でも、帝国が困っている話は聞いていて愉快ですよ」と、いって主は小声で笑った。

そろそろ船が到着する時間だ。船着き場には我々以外にも結構な人数が集まってきていた。ほとんどが帝国の関係者のようだ。船の到着と同時に人々は入り口に殺到した。我々もそれに続く形で渡り船に乗り込んだ。船は比較的大型で何層にも別れている。船の入口

すぐに馬を着ける層があり、そこに馬を繋げると、階段を上つてデッキにあがった。今日も天気がよく風がさわやかだ。

「気持ちいいですね」。

ソフィアは言った。

デッキには我々以外にも多くの乗客がいた。見たところ帝国の関係者、商人などだ。

商人のうち一人が話しかけてきた。

「帝国の関係者ですか？」

「ズーデハーフェンシュタットの傭兵部隊の者です。帝国の傭兵だから、帝国の関係者と言えますね。以前は共和国軍に所属していました」。

「共和国の！」

商人は驚いたようだ。元共和国の人間は移動が制限されているから、こんなところで会うのが珍しいのだろう。

「ちよつと身なりが帝国軍と違うので、どうかناと思って」。

傭兵部隊の制服は、正規の帝国軍とは少々異なるデザインだ。

商人はカバンを取り出して続けた。

「ミュンデイユンブルクの商人でシウルツと言います。主に魔石を扱っています。今日はちよつといいものがあるのでいかがですか？」

ミュンデイユンブルクは、ダーガリンダ王国の国境近くの街だ。そこも港町ではあるが、ダーガリンダ王国に近いこともあり、魔石の商取引でも栄えている街だ。当然、商人や貿易商も多く滞在している。

「悪いが、我々は騎士だから、あまり魔石には興味がないな」。

私は、昨日エーベルに魔石をもらったばかりだ。

「私、興味あります」。ソフィアが口を挟んだ。「私のルームメイトが魔術師で、いつも魔石を探しているみたいで」。

ソフィアは商人に言った。

「ズーデハーフェンシュタットの傭兵の魔術士で、アグネッタ・ヴィクストレームという名前の者がいるので、彼女に会えば、買うかもしれませんよ」。

「それは、ありがとうございます。でも、今日はミュンデイユンブルク

に向かっているところなので、ズーデハーフェンシュタットに来るのは、また十日後ぐらいですかね」。

シユルツは残念そうに話した。

「でも、ズーデハーフェンシュタットに来た時には必ず会ってみますよ」。

「是非」。

ソフィアは嬉しそうに言った。

しばらくして、船が河の中央を超えたところあたりで、別の人物が話しかけてきた。

「私は帝国軍の第五旅団に所属しているグラツキーと言います。どちらまで行かれるのですか」。

言葉遣いは丁寧だが、こちらを疑ってかかっているのは間違いない。鋭い目つきでこちらをうかがう。先ほど、渡し舟の主から聞いた調査団の者だろうか。

私は、先ほどルツコイから貰った命令書を取り出しつつ言った。

「私はズーデハーフェンシュタットの傭兵部隊の者です」。

そして、弟子の二人を指差して続けた。

「こちらの二人も一緒に行動しています」。

グラツキーは命令書を見て驚いたようだった。皇帝に直接面会するような内容なので、それも当然か。

「これは失礼しました。重要な指令を受けておられるのですね」。

というと、命令書を私のほうに差し出した。私はそれを受け取って内ポケットに再び戻した。

「お気をつけて」。

そう言っただけでグラツキーは離れていった。

「警戒厳重ですね」。

オットーはちよつとあきれた様子で言った。

「そうだな」。

今回の旅では、この調子で道中何回も聞かれるのだろう。命令書は常に肌身離さず持つておく必要がある。

我々は川から見える、ズーデハーフェンシュタットの街壁を眺めつ

つ、話をしながら時間をつぶした。しばらくして、船は対岸に到着する。

無名戦士の碑

私とオットー、ソフィアの三人は、渡し舟を降りた。

渡し舟でグロースアーテツヒ川を予定通りの時間で渡れたので、この後も順調にいけば、遅くとも夕方までには最初の宿場町・フルツスシュタットに着きそうだ。

この渡し船の桟橋からほど遠くない河岸は、*「ブラウロツト戦争」*の最終決戦となった地だ。帝国軍四万五千と共和国軍一万八千が衝突した。共和国軍は数の上では劣勢であったが背水の陣で臨み、予想以上の抵抗をした。この戦いで共和国軍の主力は壊滅。帝国軍にも多数の犠牲者が出た。帝国軍の生き残りは二万程度だったと、いつだったか聞いたことがある。

戦後、降伏した共和国軍に所属していた私たちは、帝国からの命令で、その戦いでの戦死者の遺体を処理する仕事を任された。数万の遺体を私が所属していた首都防衛隊の仲間と一緒に何日もかかって埋葬していった。鼻を衝く死臭、見るも無残な遺体を運び、墓穴を掘り、その中に放り込む。土を被せ、そして石で墓標を立てていく。最終的には数万の石の墓標が無機質に並べられ、その光景が脳裏に焼き付いて離れない。その仕事のことを、たまに悪夢として見ることもある。本当につらい仕事だった。あれは、二度とやりたくない。

私は、その墓地となった河岸一帯に、無名戦士の碑が建てられたと聞いたのを、ふと思いついた。一年ほど前に設置されたと言う。しかし、旅の道からは、少し遠回りになる。

「少し寄り道、いいか？」 私はオットーとソフィアに訊いた。「無名戦士の碑を見てみたい」

二人は頷き、私の後を着いて来る。

船着き場からグロースアーテツヒ川の川沿いに三十分ばかり進んだところにその碑はあった。無機質な墓標の群れが並んでいる手前に私の身長より大きな石で碑が建てられている。

ズーデハーフェンシュタットの住民の要望でこの碑が建てられた。ズーデハーフェンシュタット駐留軍の司令官がルツコイだったから

許可された、と言うこともあるだろう。彼は元敵ながら慈悲深い人物だと思ふ。

碑の前に、一人の女性が立っている。どうやら、足元にある花を手向けに来たらしい。この近くの街か村の住民だろうか？

我々が碑の前に到着したと同時に、女性は振り向いて立ち去ろうとした。見たところ三十歳程度、金髪でショートカットが似合う。服装は少し土で汚れていた。近くの農民であろうか？ それとも、我々の最初の目的地、フルツスシュタットの住民か？

「こんにちは」。

私は声を掛けた。

「こんにちは」。

女性は返事した。そして、少し微笑んでから、我々とすれ違い、近くに繋いであった馬に乗って立ち去って行った。

我々は、その背中を少しの時間、見送った。

私とオットー、ソフィアは黙祷をするため、馬を降り、碑の前で暫く過ごした。

黙祷を終えると、オットーが話しかけてきた。

「ここでの戦いも凄惨なものだったようですね」。

「そうだね。帝国軍の犠牲をものともしない攻撃で、共和国、帝国双方合わせて四万人以上の死者が出た」。

そういえば、オットー自身は、彼の故郷モルデンで街の大部分が焼け野原になるほどの戦いに参加していた。そこでは、軍人だけでなく民間人も多数の犠牲者が出たという。想像するしかないが、別の意味で凄惨な戦いだったのだろう。

「『ブラウロット戦争』は、ここ五〇年の内で最も規模の大きな戦争だった」。私は軽くため息をついてから続けた。「なぜ、帝国がそんな戦争に踏み切ったのか理由を知りたい」。

オットー、ソフィアもその言葉に頷いた。今回の帝国首都への旅で、その疑問の解答も見つかればよいが。

我々三人は、無名戦士の碑を後にして、最初の目的地フルツスシュタットに向け出発した。

酒場

無名戦士の碑を見るため若干遠回りしたが、比較的早い時間に最初の宿場町・フルツスシユタツトに着くことができた。共和国崩壊後は民間人の旅人が減ったが、代わって帝国軍や帝国政府の関係者が宿場町を利用してゐる。小さな宿場町だが、一般の町民に混ざって帝国の関係者らしき人々が町中を歩いているのが目立つ。我々は適当な宿場を見つけ、明日の朝の出発時間を決めて部屋に入った。弟子のオットー、ソフィアの二人もそれぞれの部屋に別れていった。私は、少し休んだ後、あたりが暗くなってきた頃に情報収集で盛り場まで行くことにした。朝に聞いた渡し舟の主に話が気になったからだ。

私は宿からさほど遠くない、この町で一番有名な酒場に入ることにした。戦争が起こる数年前に何度か入ったことのある店だ。マスターのガンツはまだいるだろうか。私は酒場の扉をあけた。店の中は結構な賑わいだ。客は制服など身なりから帝国の関係者が目立つ。早速、カウンターに向かった。ガンツが豪快に笑いながら声をかけてきた。

「誰かと思えば、クリーガーじゃないか。随分、久しぶりだな。ははは」。

「やあ、調子はどうだい？」

「まあまあかな。何とか店は続けられているよ」
「と言いつつ、結構にぎわっているじゃないか」

私は、カウンターにもたれかかるように後ろを振り返り、改めて店の中を見回した。

「ああ、半分以上が帝国の連中だけだね」。

ガンツは少し首をすくめて続けた。

「帝国の首都でいろいろあるらしくてね。調査団とかなんとかいう連中が多いね」。

「鉱山地方の蒸留酒をくれ」。

私は酒を注文した。ガンツは素早くグラスに氷を入れ、瓶から酒を注ぎ私の前に置いた。

私とガンツは店の仕事をこなしながら、戦中や戦後にあつたお互いの身の上話をしばらくして懐かしんだ。会話が進んで、しばらくして、ガンツは話題を変えた。

「ところで、どこかへ行く途中なのかい？」

私はあたりを見回して帝国の関係者らしき客を確認した後、ガンツに向き直った。

「そうだ、首都に行かなければならなかったのですね」。

「首都？ああ、アリーグラードか。仕事で？」

ガンツは驚いて聞いた。

「そうだ」

「今は何の仕事だっけ？」

「帝国の傭兵をやっている」

「ほう。傭兵が帝国の首都にねえ」。

というと、ガンツはにやりと笑った。元共和国出身者は移動が制限されているので、特殊な任務だろうと気づいたのであろう。ガンツは勘のいい男だ。

ウエイトレスが注文をいくつかとってきたので、ガンツは他の酒も手早く注いでウエイトレスにもっていくように指示した。

そのウエイトレスが、私に声を掛けてきた。

「あら、さっきの人」。

そういわれて、私は振り向いてウエイトレスの顔を見た。無名戦士の碑のところにいた女性だ。

「やあ、こんなところで会うとは奇遇ですね」。

私は笑顔で答えた。

「なんだ、知り合いなのかい？」

ガンツが尋ねる。

「知り合いじゃあない。今日、無名戦士の碑で見かけたただだよ」。
「そうか」。

ガンツはにやりと笑った。

ウエイトレスは酒を持って店の奥に向かった。

「彼女の名前は、マリアで、元共和国軍の兵士だった」。ガンツは言う。

「旦那も兵士だったんだが、『ブラウロット戦争』のグロースアーテツヒ川の戦闘で旦那を亡くしたんだよ」。

なるほど、だから無名戦士の碑に居たのか。私は納得した。

「彼女自身は首都防衛隊だったので、死なずに済んだようだけどね」。

彼女も首都防衛隊だったのか、私もそうだが、それは命拾いだ。防衛隊と言っても五千人近くも所属していたから、彼女とは直接面識はなかったが。

「彼女を狙っているんなら、私から、あることないこと、良く言つとくよ」。

ガンツは再びにやりと笑った。

「いや、間に合っている」

私は断った。彼はお節介でもあるのを思い出した。

「なんだ、そうか。でも、気が変わったら言ってくれ」。

ガンツはそう言うと、別の注文の酒を造り始めた。

ある程度、ガンツの作業が落ち着いたのを見て、私は首都で起こっている話を振ってみることにした。帝国の関係者に聞かれないように少し小声で話す。

「ところで、首都で起こっていることは知っているか？翼竜の襲撃を受けているそうだが」。

ガンツも音量を小さくして答えた。

「聞いたことがある。半年と少し前から、大体一か月に一度のペースでやって来ているらしい。しかしなぜ翼竜がわざわざ首都まで飛んでくるのか。その原因が全く不明だそうだ」。

「この店には、その調査団が多いのか？」

「そうだ。翼竜は、なんでも、ズーデハーフェンシュタットの沖合の島から来ているそう。そうだとすると、なぜ、より近いズーデハーフェンシュタットを襲わずにわざわざ内陸にある首都まで飛んで行くのか」

「理由があるな」。

私は疑問に思っていることをぶつけてみた。

「誰かが、そうさせているんじゃないか？例えば、帝国に恨みのある魔

術師が呼んでいるとか」。

「まあ、帝国に恨みを持つている者は沢山いるだろうがね」。

私もその一人だ、と言おうとしたが止まった。ここには帝国の関係者が多い。万が一でも、彼らの耳に入ったら一大事だ。

ガンツは続ける。

「帝国は、その線も調査しているようだよ。しかし、理由は知らないが、首都での調査は早々と切り上げるような命令が皇帝から出たらしい。そんな遠くから翼竜を呼べるような強力な魔術を使える者はそもそもいないと言つてね。たしかに普通じゃありえない。それで、軍は首都以外を調査しているようだね」。

ここの宿場町にも帝国の調査団がいるということは、ズーデハーフェンシユタットにも調査団は来ていたのか？そんな話は聞いたことがなかったが。そして、なぜ皇帝は調査をやめるように言ったのか？、軍は皇帝の命令を無視して秘密裏に調査をしているのか？謎は深まるばかりだ。

私は、もう一つ的话题を振ってみることにした。

「今日、聞いたのだが、『預言者』と呼ばれる人物が皇帝に取り入っているとか？」

「ああ、三年前ほどからね。どうやら戦争好きな人物のようだよ。『預言者』が皇帝に取り入ってから、軍備増強が始まったと言うよ」。

「『預言者』とは何者だ？」

「それは全然わからない。出身も経歴もね」。

『預言者』が現れてから、皇帝が人前に出ることとはほとんどなくなり、普段は皇帝の代わりに『預言者』が皇帝の命令を伝えているという。聞けば聞くほど『預言者』という人物は胡散臭い。

「最近、皇女ですら皇帝に会えることがあまりないというね」。

と、ガンツは言った。そうだ、そういえば皇帝には一人娘の皇女イリアがいたな。さほど表舞台に出てこないのですっかり忘れていた。

短時間で参考になる話がいくつか聞いた。明日も朝早いのでそろそろ宿屋に戻ろうと思う。最後にガンツに話しかけた。

「しかし、さすがによく知っているね」。

「人は酒が入ると口が軽くなるからね」

ガンツは、いたずらっぽく笑った。

「聞かないことまで話してくる奴も中にはいる」。

「今日はありがとう。そのうち、また来るよ」

と言うと、私は金を払って酒場を後にした。

実戦

私はベッドから起きだし、旅支度を整え、弟子達との集合場所である食堂へ向かった。ソフィア、オットーの二人は既に食堂にいた。

「おはよう、早いね。」

私は手を挙げて挨拶した。

「おはようございます。我々もさつき来たばかりですよ」

オットーは微笑んで答えた。

「よく眠れたかい？」

「はい。」

弟子二人は同時に答えた。

我々は早々に食事を取り、先を急ぐことにした。次の目的地はモルデン、旧共和国では第三の都市であった。そこはオットーの故郷でもある。

我々は馬を進め、当初、旅は順調に進んでいたが、モルデンまであと二時間程度のところまで来たところで予定外の出来事が起きる。

正面から馬に乗った三人が近づいてくる。道中、ほかの旅人とすれ違うことはある。大体が帝国軍の関係者だ。しかし、今近づいてくる三人はローブを深くかぶり、様相が帝国軍とは違う。

私は弟子二人に声をかけた。

「あの三人、ちょっと注意しろ。」

さらに、後ろも振り返ってみた。後ろからは二人近づいてきている。

「挟み撃ちか！」

オットーが叫んだ。

「いや、囲まれたな。」

私は落ち着いた口調で言った。道の両側は背の高い草原となっている。身を隠すにはもって付けた。草が不自然に揺れているが、おそらく何者かが潜んでいるようだ。草原の中の人数は判断がつかない。

「先手を打とう。前の三人は任せろ。両側に注意しながら、後ろの二人の対応を」。

私も馬に足で横つ腹を蹴り合図した。馬は一気に加速し前方の三人へ突進する。オットーとソフィアも手綱を素早くさばき、馬を反転させた。

私の正面の三人は慌てた様子で剣を抜いた。距離があつたが、私はナイフを一本取り出し素早く投げつけた。ナイフは右の男の胸に突き刺さり、男はうめき声をあげて落馬した。

馬は残りの二人にさらに接近する。ここでナイフを投げつけると一人は倒せるかもしれないが、残る一人の剣を躲しきれないと咄嗟に判断し、私は剣の鏢に手をかけた。そして、自らの馬を二人の右側に誘導することで、一對一の立ち合いになるようにする。残る一人は私の正面の男の後ろ側になり、こちらまで剣が届かない。

私は相手とすれ違いになる寸前に、相手の剣の振りかざされた剣を躲すため、身を少し前にかがめた。それと同時に私は素早く剣を抜き、そのまま流れるように相手の脇腹を狙う。相手の剣は私の頭の少し上をかすめ、逆に私の剣は相手を捉えていた。馬のスピードが出ていたこともあつて、これは致命傷だろうとわかる手ごたえが剣から伝わってきた。私の剣で切られた男は、馬にまたがったままの状態そのまま前のめりになった。馬は男を乗せたままゆつくりと前に進んでいく、数歩進んだところで男は力なく馬から落ちた。

残る一人が馬を反転させ、こちらに向かおうとしていた。こちらも馬を反転させ、今度は私はナイフをもう一本取り出し、投げつけた。ナイフは男の喉元に突き刺さり、男は後ろへ落馬した。

私は、そのまま後ろの敵に向かったオットーとソフィアの二人を指して馬を走らせた。気が付けば両脇の草むらからは火が上がっていた。黒い煙があたりを充満させている。後ろの二人にはソフィアが相手したらしい。すでに一人は落馬して地面に横たわっていた。もう一人とは鏢迫り合いを続けている。オットーは見えないが火がついている草むら中に突入したようだ。剣の激しくぶつかる音と叫び声が聞こえる。左側から火に追われた二人の男たちが飛び出してくるのが見えた。一人は服に火が移っている、全身火だるまだ。もう一人が必死に消そうとしているが、なかなか火は消えない。

そうしているとオットーが右側の草むらから出てきた。どうやら相手を倒したらしい。ソフィアももう一人を倒し、こちらに向かってきた。服に火が移っていた男は、倒れこんだまま動かなくなっていた。仲間の火を消そうとしていた男は、すでに戦意消失だ。ひざまずいて、こちらを見上げています。

私はオットーに尋ねた。

「何人倒した？」

「二人です」。

「私は三人、ソフィアは二人。そして、この二人、合わせて九人いたのか。九人の敵も数分で全滅だな」。

この旅で、実戦は初めてだったが上出来だろう。まさかこんなところで突然、実戦を体験することになるとは、予想もしていなかったが。「草むらに火をつけたのは、オットーか？」

私は尋ねた。

「そうです、敵をいぶりだすのに火炎魔術を使いました」。

オットーはちよつと誇らしげに答えた。彼自身の判断がうまくいったので上機嫌のようだ。

「なるほど。では、草原の火を消そう」

そう言つて、我々三人は水操魔術で大気中の水分を凝結させ、火のついた草原に局地的に雨を降らせた。火は瞬く間に消えていく。

火が消えたのを確認した後、私はひざまずいている男に尋ねた。

「何者だ？なぜ我々を襲った？」

男はおびえた口調で話し出した。

「俺らは通行人を襲つて金品をいただいて生計を立てている」。

「要は盗賊ということか」。

私はあきれた口調で言った。

「最近旅人がめつきり減つたので、久しぶりの獲物だと思つたのに…」。

「相手が悪かつたな。私たちは帝国軍の傭兵だ。ただの旅人ではない」。

男は無言でうなだれた。

私は続けた。

「命は助けてやろう。ほかに仲間はあるのか？」

男は何も言わず、うつむいたままだ。

「この男、どうしますか？」

ソフィアが少々怒気をはらんだ声で尋ねた。

「このまま、解放するわけにはいかんな、モルデンまで連れて行って、そこの帝国の当局に引き渡そう。後は、当局が何らかの対応をしてくれるだろう」。

私は荷物の中からロープを取り出し、馬を降り男の手を縛った。さらにそのロープをオットーに引かせてモルデンまで歩かせることにした。

その前に、男たちの遺体から自分が投げたナイフを回収する。ナイフの犠牲となった二人は、毒が回ったことにより絶命している。

私はオットーとソフィアに尋ねた。

「今回の実戦はどうだった？」

ソフィアは、「訓練の通りやりました。思ったより、うまくいったと思います」と、答えた。

オットーは、「今回は、相手が盗賊だったからうまくやれましたが、訓練された騎士などでは、こうはいかないと思います」。

二人ともまだ、やや興奮気味の様子だ。久しぶりの実戦で、しかも相手を斬ったのだ、しばらくは落ち着かないかもしれない。逆に私は意外にも感情は冷めていた。

「その通りだ。今後はもつと強い敵と当たることがあるだろうが、決して油断するな」。

とはいえ、最初の実戦としては、ちょうどいい相手だったのかもしれない。私自身も、ナイフの正確性や、剣さばきが落ちていないのを再確認できた。